

# 連合会だより 68号

226 団体  
89,275 世帯  
町田市原町田 4-9-8  
042-722-4262  
発行人 松元 洋

## 会長研修会報告

今回の会長研修会は震災対策の基本である避難所開設・運営をテーマに新潟県中越地震に見舞われ、その経験や教訓を後世に残すために作られた「おぢや震災ミュージアムそなえ館」の見学でした。9月14日霧雨の中、朝8時に町田を出発し越後湯沢で昼食をとり、午後2時「そなえ館」に無事到着。

平成16年10月23日マグニチュード6.8、震度6強の直下型地震に襲われた新潟県小千谷市。その様子を発生直後、3時間後、3日後、3か月後と時系列にその時々での混乱や対応を、案内役の松本勝男さんの語りにより詳しく知る事ができました。地滑りや土石流により寸断された幹線道路、農家のビニールハウスを避難場所にしたケースなど写真や動画を見ながら説明を受けた。



一瞬にして散乱したキッチン

説明の中で多くの教訓を得ました。この年、「平成16年7月新潟・福島豪雨」により地域一帯の地盤がゆるくなっていました。そのことが約1万棟もの建物が被害を受けた要因の一つであったと言われていました。自然災害の原因が重層的になった場合の恐ろしさを痛感しました。また阪神淡路大震災の火災原因の6割を占めた通電火災が0件でした。これは神戸市職員による適切なアドバイスが役立ちました。過去の災害から学習して次の災害に活かしていく姿勢がいかに大事かを考えさせられました。ほかにも、道路が寸断され孤立した集落にとって一番大事なものは、水や食料よりも「情報」であるといった事。固定していない家電が凶器になるといった事は実際体験した者でしか伝えられない教訓です。

避難所生活についても説明がありました。体育館などの避難場所に住民を入れる場合も、やみくもに入れるのではなく地域単位に束ねながら区割りしていくのが望ましいと松本さんは語っていました。他の地域の顔も知らない人たちが狭い場所で



避難者であふれる体育館

生活することで大きなストレスが発生し避難場所のスタッフや責任者を困惑させる事態になったと体験談を語ってくれました。この体験談は避難場所の管理運営者になる可能性が高い町内会・自治会役員にとって記憶に留めなくてはならない話であったと思います。そしてなりよりも地域の中でのコミュニケーションがいかに大切であるか、消防隊や自衛隊の救助の前に地域住民の共助により助けられた住民がいかに多いか、「何よりもまず自分自身が助かってこそ他人を救うことができる」との言葉に筆者自身の身の回りの防災対策が不十分である事を反省させられました。最後にNPO防災サポートおぢや理事で語り部の風間久司氏から「避難所の運営費用は証拠書類が必要である」「指定の避難場所以外では物資が届かない恐れがある」などこの紙面に書き尽くせないほどのアドバイスをいただき、中身の濃い「そなえ館」見学でありました。

新潟中越大地震を体験されたお二人の話には説得力があり、その中から得た教訓の一つ一つは大きな地震を体験していない我々にとって得難い言葉として参加者全員深く心に刻まれたと感じました。



研修風景